第Ⅰ部　サブカルチャー教材を用いた授業の可能性

序　章　サブカルチャー教材による国語科授業開発の課題と方法

第１節　なぜサブカルチャーを取り上げるのか

１　社会環境と教育現場の現在

２１世紀を迎えて、時代は大きく変容している。たとえば環境問題に目を向けても、世界全体が深刻な危機に直面していることは明らかである。時代とともに社会は急速に変容し、その社会を生きる人間も様々な形で変容を遂げつつある。子どもが育つ社会環境の実態を的確に把握し、常に時代の変化を敏感に察知することは教育の重要な課題である。

教育の現在をとらえる言説として、「生きる力」や「ゆとりと充実」などがキャッチフレーズのように繰り返し取り上げられてきた。一方で、いじめ、不登校、引きこもり、中途退学、学級崩壊等々、教育の現場には多くの問題が根強く存在し続ける。このような授業以前とも言える問題への対応に日々悩まされる教師にとって、授業内容の充実は苛酷な課題にほかならない。教育制度の改革が、現場の教育問題に有効に機能するのかどうかという疑問がある。

現場の担当者は、常に毎日の授業をどのように組み立てるのかという現実的な課題の対応に追われている。それどころか、授業以前の問題として、生活指導のための対応に苦慮してもいる。子どもたちの抱える問題は、教師の力量では手に負えない解決困難な状況へと追い込まれている。カウンセラーのような専門家を常駐させている現場も多い。加えて、学校には膨大な量の業務が山積して、教師がじっくりと教材研究に打ち込む時間的な余裕は決して多くはない。教科教育の場所としての授業内容の充実こそが、最も重要な課題であると理解しつつも、現実的には達成困難な状況がある。学校業務のシステム化を図るために導入されたＩＴ関連機器も、決して業務削減に有効な手段とはなり得ていない。それどころか、教員室に設置された多くのコンピュータは、教師と学習者との対話の場面を奪ってしまってさえもいる。学習者と直接顔を合わせるよりも、コンピュータのディスプレイをひたすら眺める教師は確実に増えている。

ここで教室の学習者の現実に目を向けてみると、授業妨害と呼ぶまでには至らないまでも、授業中の私語や居眠り、「内職」と称される授業以外の科目の学習は恒常的に行われている。密かに漫画やゲームを楽しむ学習者もいて、生活指導面での対応が求められることが多い。さらに、授業中に何のためらいもなく飲食をする者、不用意に携帯電話の派手な着信音を鳴らす者、携帯電話で友人とのメールのやりとりに熱中する者なども散見されるようになった。特に中学生・高校生のモラルの低下は、学校を離れた公共の場所でも問題になっているが、授業中の彼らの状況を見ると、授業以前の問題があまりにも多いことに気づかされる。

ところで真に問題にするべきは、授業以前の問題が山積するような現場だけではない。一見何の問題もなく、授業が成立しているように見える教室こそ、より厳格に検証する必

要がある。国語科の授業に即して考えれば、例えば次のような光景を直ちに思い浮かべることにさほどためらいはない。

ある教材を数名の学習者に指名読みさせる。その後で再び教師が少しずつ区切って読む。読んで、その文章の内容に関していくつかの説明を加える。説明しながら教師が重要事項を板書して、学習者はその内容をそのままノートに写す。教室はきわめて静粛で、居眠りをしている学習者のほかは一見して全員授業に参加しているように見える。このような授業を展開した場合、板書事項がそのまま定期試験の問題として出題されることが多い。学習者は教師の説明を聞き、板書事項をひたすらノートに写し、定期試験に出題されるからという理由で、チェックペンやチェックシートを駆使しながらその内容を暗記する。授業内容に対する主体的な興味からではない。上級の学校への進学というきわめて実利的な目的意識のために、彼らは機械的にノートを暗記する。授業中に居眠りをしていた学習者は友人からノートを借りてコピーを取り、同じくその内容を暗記する。すなわち「読んで、説明して、分からせて、暗記させる」という授業形態が、国語科の授業の風景としてごく一般的なものになってしまっている。そこに、本当に授業が成立しているのだろうか。教師は単に授業の幻想を、授業の真実だと思い込んでいるだけではないのか。わたくしの問題意識は、そこから出発する。

一クラス４０人もの学習者全員に同じレベルの学習を展開するという授業の形態は、いまの子どもたちの現実に十分に対応できるものではない。もちろん学校でもこの問題に無関心でいられるはずはなく、様々な方法で新しい試みが取り入れられつつある。グループ学習やティームティーチングの導入、教育機器の活用などは、その具体的な例である。ただし国語科の授業において、一斉授業という伝統的な形態の抱える問題点を克服し、新たな可能性を開くことは容易なことではない。一斉授業による読解中心の授業は、国語教育の歴史の中に深く根付いた制度と見ることができる。

一斉授業の基盤には、「文化の伝達」という学校教育の大きな目標がある。もちろんこの目標は大切には違いないが、これからの学校は文化の伝達や知識の注入のみにこだわることなく、より大胆に学習者にとって「楽しい」という要素を、様々な場面に取り入れる努力をするべきではないだろうか。教師はまず担当科目の授業内容に、「楽しい」要素をいかに導入するのかを真剣に模索しなければならない。学習者が自ら興味・関心を持って学習に取り組むことによって、初めて授業は成立する。

授業を成立させるためには、これまで以上に教師の側の工夫が必要になったことは論をまたない。国語科の授業を成立させるために、教師主導型の読解を中心とした授業だけではなく、真の意味での学習者主導型の表現活動を中心とした授業を積極的に開発したいと考えている。「授業開発」はきわめて重要な国語教育の課題となる。

２　言語環境の現在

ところで国語教育とは、その名称のように「ことばの教育」である。しかしながら２１世紀の国語教育を考えるとき、「ことば」のみを対象とした教育ではとらえきれないものがあるのではないか。その代表的なものは映像である。モノクロームのテレビが出現してから、カラーの鮮明な画像が配信される現在に至るまで、テレビは飛躍的な進化を遂げつつ

急速に普及した。子どもたちはいま、豊かな映像の中で生活している。このようなメディア環境の変化は、子どもの言語環境に大きな変化をもたらした。このような子どもの言語（メディア）環境の変化に対応するために、静止画をも含めた映像を「ことば」との関係からとらえることは、重要な国語教育の課題となっている。２００７年現在、メディア・リテラシーの問題が様々な形で国語教育の観点から取り上げられるようになったことは、まさに国語教育担当者が映像とことばとの接点に目を向ける必要が生じたことを意味している。そこで、映像をも含めた「教材開発」の重要性が浮上する。

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域に加えて、「見ること」という新たな領域を国語科の領域として考える必要が生じつつある。今後は、ことばのリテラシーはメディア・リテラシーとして、そしてビジュアル・リテラシーとして、広い視野からとらえることになることも予測できる。国語科の研究として、動画リテラシーやビジュアルリテラシーに関する研究が出てきたことは注目に値する。

本研究では国語教育の範囲を単なることばのみにとどめずに、映像を含めた多様なメディアとの関連から把握してみた。その視点こそが、２１世紀の新しい国語教育の可能性を切り開いてくれる。

３　「学び」から逃走した学習者のために

学校は、子どもたちにとって楽しい学びの場でなければならない。教科に対する興味・関心の喚起と学力の育成は、すべての教科に共通する学校教育の基本的な目標である。子どもたちを学びへといざなうことは、教科担当者の責務と言える。しかしながら現場教師の不断の努力にもかかわらず、子どもたちの学びの場としての学校からの乖離という現実は、深刻な問題を提起している。

このような事態を佐藤学は「『学び』からの逃走」として把握した[1]。佐藤は、子どもたちの校外の学習時間や読書冊数、および教科嫌いに関する実態調査の結果を分析して、「大半の子どもは小学校の高学年頃から『学び』を拒絶し『学び』から逃走しています」[2]と指摘したうえで、次のように述べている。

> 二一世紀は「学びの時代」と言われています。二一世紀は「生涯学習の社会」とも言われています。これらの言葉は二一世紀の社会の可能性を示す楽天的な希望を含んでいます。しかし、子どもたちの大半は、それと逆行する生活をし、年々、学習社会から排除されているのが現実です。そこから生まれるのが、学ぶことに対するニヒリズム（虚無主義）とシニシズム（冷笑主義）です。[3]

佐藤は、東アジア型の「圧縮された近代化」の教育システムが破綻し、社会の変貌と行政の教育改革の失敗という事態を踏まえて、「学び」の実現に向けて次の三点の遂行を提案した。

① 「モノや人やこと」との出会いと対話による「活動的な学び」を実現すること。
② 他者との対話による「協同的な学び」を実現すること。
③ 知識や技能を獲得し蓄積する「勉強」から脱して、知識や技能を表現し共有し吟味する「学び」を実現すること。[4]

学校教育の基底にある文化の伝達という目標のために、教科に関わる知の体系を教え込

む必要性が強調される。それは、佐藤が指摘した第３点目の「勉強」ということばに象徴されるものである。その一方で高度情報化社会は、子どもたちに「学校知」と称される知の枠組みを超えた多様な知を提供する。教師は、学校以外の場で学ぶ子どもたちの実態にも目を向けて、彼らの実像を明らかにしなければならない。そのうえで、学校ではそして授業では、何をどのように教育するべきかという基本的な問いを問い直す必要がある。関係者が力を合わせて、学校がまさに「学び」のための場所として機能できるように努力しなければならない。

問題解決に向けての佐藤の提案を受け止めつつ、解決への糸口として、子どもたちが身近な場所で接している素材に目を向けてみたい。「逃走」した子どもたちを強制的に「学び」の場へと連れ戻すのではなく、彼らが生活している「いま、ここ」という地平に「学び」を立ち上げることはできないものだろうか。わたくしは彼らが興味・関心を有する様々な素材に着目して、まさにその素材を通して国語科の「学び」が成立する可能性を追求してきた。それらの多くは、漫画、アニメーション、音楽、映像、テレビゲーム、携帯電話などの「サブカルチャー」として括られるものであった。それらは、学校とは異質なものとして排除されることが多かったわけだが、わたくしはかねてから教材として成立する境界に位置付け、「境界線上の教材」としての可能性を探ってきた。[5]ここで「境界線」と称したのは、国語科の教材として成立するかしないかという場所としての「境界線」であり、その上にある教材とは、現時点においては教材と成り得るけれども、慎重に取り扱わなければ、教材とは言えないものになるという意味合いにおいて用いている。

４　研究の目的と方法

本研究の最大の目的は、大きく述べれば２１世紀の国語教育の可能性、いま少し焦点を絞るなら２１世紀の日本の国語科授業の可能性を探ることにある。その可能性を、具体的な実践を通して検証することが、本研究の最も中心となる課題である。

わたくしは１９７４年４月から国語科の教師として中学校・高等学校の国語教育を担当してきた。さらに大学および大学院、そして管理職の立場ではあるが小学校の現場にも勤務してきた。小学校から大学・大学院まで、広い校種の学習者とともに過ごしてきた。その間、常に効果的な授業の創造という点を目標として、実践を積み重ねてきた。教育現場での様々な実践を整理し総括する過程で、実践の中から帰納的に国語教育の理論をある程度は構築することができたと考えている。本研究では、個々の実践を具体的に記述することを通して、帰納的に実践理論が明らかになるように配慮する。

本研究の研究方法は、第一に具体的な実践、すなわち授業内容の記述を重視する。国語教育の研究は実践を基盤とする。現場の教育実践に実際に役立つものこそが、国語教育の重要な理論でもある。現場から乖離した国語教育研究は、決して有効なものではありえない。本研究では、わたくしが１９７４年から今日（２００７年）まで継続して実践している国語科の授業内容に即して、平易で具体的な記述を心がける。

２１世紀の国語教育の可能性を開くために、わたくしたちが最も重視しなければならないことは、国語科の学習内容に関する学習者の興味・関心を喚起することである。もちろん興味・関心の喚起とともに、国語学力育成に関しても常に配慮しなければならない。端

的に表現するなら、まさに「楽しく、力のつく」授業の創造ということになる。その中でも、特に国語科の学習に対する興味・関心、および学習意欲の喚起はきわめて重要な実践的課題である。そこで、サブカルチャー教材による国語科の授業を構想することによって、学習者の興味・関心、および学習意欲を喚起する方略を探ることに本研究の主眼が置かれることになる。そしてすべて具体的な授業実践に即した考察を試みるところが本研究の特色である。

現代社会を生きる学習者にとって、苦労してこそ尊いものを獲得できるという価値観は馴染むものではない。彼らが真に「心楽しい」と思えるような経験を、授業の中に保証することが重要である。それは決して学習者に迎合するものではない。かつてハーバート・リードは芸術を「心楽しい形式をつくる試み」と定義した[6]。この定義を参照するなら、授業もまた芸術と同様に「心楽しい形式をつくる試み」にあてはまる。わたくしは、学習者の興味・関心の喚起という要素を授業の最も重要な目標として位置付けつつ、工夫に満ちた授業開発を志してきた。それは「工夫」の域を超えた国語教育の「戦略」でもあった。

わたくしの授業開発の中核には、効果的な教材開発という課題が存在する。学習者が主体的な興味・関心を寄せる素材の中には、「サブカルチャー」と称されるものが多く含まれている。本研究ではこのサブカルチャーに注目し、その教材化を最重要課題として位置付けた。それは、学校が排除し続けた素材で、教材というカテゴリーに含めて考えるにはためらいもあった。ただし、指導法を工夫することによって、それらの「素材」は「教材」として成立するぎりぎりの「境界線上」にまで至らしめることができるものであった。そして、それは決して「副教材（補助教材）」ではなくあくまでも「主教材（本教材）」として位置付けられる必要がある。本研究では、サブカルチャー教材を主（本）教材として用いた国語科の授業実践を具体的に提示することによって、教材開発および授業開発の可能性を検証するつもりである。

本研究は大きく三部構成とした。第Ⅰ部は「総論編（序論）」として、国語教育に関わる問題群を広く見渡して、特に教材開発および授業開発という側面から問題を整理する。多くの学習者が関心を寄せるサブカルチャーに目を向けて、国語教育と関連する要素を明らかにしつつ授業の可能性を追究する。第Ⅱ部は「各論編（本論）」として、サブカルチャー教材を分類して、それぞれの教材化の実例およびそれを用いた授業実践について具体的に紹介する。特に学習者の興味・関心を喚起するための方略を明らかにしてみたい。そして第Ⅲ部は「総括編（結論）」として、本研究で明らかになった点を踏まえつつ、改めて国語科の教材開発および授業開発の問題に言及し全体を総括したうえで、これからの課題についての提言をする。

なお、本研究で紹介するわたくし自身の実践は、その多くが前任校の早稲田大学早稲田実業学校中等部および高等部のものである。したがって、具体的な授業の話題は中等教育に関するものが中心となるが、必要に応じて現在担当する高等教育に関しても言及する。このことから国語教育の対象となる相手に対して、小学生から大学生まで共通して用いられる「学習者」という用語を中心に使用する。学習者の国語科に対する興味・関心を喚起するための方略を自らの実践を通して検証しつつ、２１世紀の日本の国語教育の可能性を真摯に探ることにしたい。

注

[1] 佐藤学は「『学び』から逃走する子どもたち」(『世界』１９９８．1)、「子どもたちはなぜ『学び』から逃走するか」(『世界』２０００．５)、『「学び」から逃走する子どもたち』(岩波ブックレット、２０００．１２）などの論文において、様々な実態調査を踏まえつつ、子どもたちの「『学び』からの逃走」について言及している。

[2] 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』(岩波ブックレット、２０００．１２)。

[3] 注２に同じ。

[4] 注２に同じ。

[5] 町田守弘『国語教育の戦略』(東洋館出版社、２００１．４)、『国語科授業構想の展開』（三省堂、２００３．１０）において、「境界線上の教材」を用いた具体的な実践を紹介している。その実践の一部を、本研究において取り上げる。

[6] ハーバート・リード『芸術の意味』(滝口修造訳、みすず書房、１９６６．６）によれば、「芸術とは心楽しい形式をつくる試みである。ともっとも単純に、もっとも一般的に定義することができる。」とされている。